2023 | Autumn | 通巻11号

和歌山大学
紀州研 News Letter

きのみなと

紀之水門

資料紹介　「渡航案内」について

仕事を目的とした海外への渡航、いわゆる海外移民は明治期に始まっている。現在のように誰もが容易に外国の情報を得ることができなかった時代、どのようにして人々は移民先の情報を得ることができたのだろうか。

政府間協定による集団的移民の募集や仲介業者による募集、パイオニアとして先陣を切った人々からの呼び寄せなどさまざまな渡航の方法やきっかけがあったが、情報提供の媒体は、渡航案内、栞、パンフレット、絵葉書などの紙媒体が中心であった。これらは人から人への伝聞や移動経験者によって筆記されたものに端を発する。

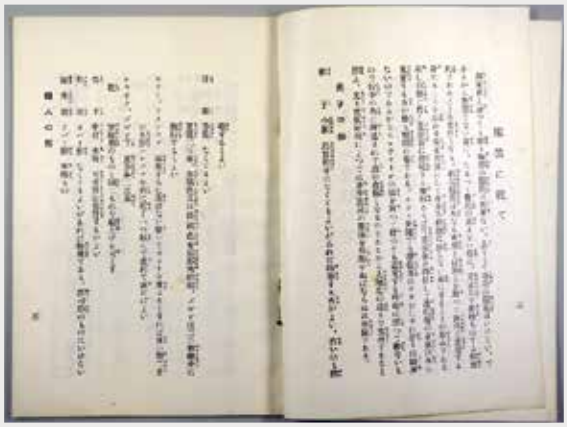
筋師千代市編著（明治39）『英語獨案内』（紀州経済史文化史研究所蔵/江利川春雄氏旧蔵）　※写真は、大正5年発行の第十版

渡米に関する渡航案内書を例に挙げると、1900年（明治33）あたりから1906年（明治39）頃までの間に集中して発刊されているが、この時期は数年の労働契約を終えて帰国した人々がアメリカに関する生の情報を持ち帰ったことが背景の一つとなっている（東, 2016）。移民として先駆的に渡航した人々のなかには、後進の移民のために自らの渡航経験を記して自費出版した例もみられる（東・江利川, 2004; 東, 2005）。

1970年代初頭まで海外への移動は船が中心であった。日本郵船などの船舶会社によって渡航案内書やパンフレットが発行され、美しいデザインで航路図や船の発着情報、船内の施設や料金などの情報が提供された。移民事業を扱う協会や移民する人々が渡航前後に滞在した宿泊施設などの情報を提供する側によって特徴に違いはあるが、渡航前の手続きや諸費用、渡航先の地理的状況や気候、さらには日本の習慣との違いや日本人としてのあり方にまで言及するなど多岐にわたる情報を提供している。

（東悦子）

日本郵船株式会社（大正2年）
「日本郵船株式会社」
（紀州経済史文化史研究所蔵/
岡本幸子氏旧蔵）



和歌山県海外移住組合（昭和4年）『ブラジル渡航の栞（一）』
（紀州経済史文化史研究所蔵/小滝徳五郎氏旧蔵）

参考文献

東悦子・江利川春雄（2004）「紀州太地村で出版された移民用の英語教材―筋師千代市『英語獨案内』の文化史的価値―」『紀州経済史文化史研究所紀要』第24号 pp.10-15

東悦子（2005）「移民用英語教材―筋師千代市『英語獨案内』―　再考」『紀州経済史文化史研究所紀要』第26号 pp.53-65

東悦子（2016）「「渡航案内」にみる英語学習・異文化学習―移住者のための水先案内書」根川幸男・井上章一（編著）『越境と連動の日系移民教育史　複数文化体験の視座』pp.71-90

「紀州藩家老三浦家文書」にみる刀剣受容の一端―「江雪左文字（こうせつさもんじ）」を例として

ふくやま美術館では、2023年2月4日（土）から3月19日（日）にかけて、特別展「名刀　江雪左文字―江雪斎、家康、頼宣が愛した刀の物語―」を開催した。これは、当館が所蔵する国宝の太刀「江雪左文字」の伝来に注目した展覧会である。「江雪左文字」とは、南北朝時代に筑前国の刀工「左文字」が作った太刀で、後北条氏の武将である板部岡江雪斎（いたべおかこうせつさい）が所持したことからその名で知られている。江雪斎から徳川家康へ献上されたのち、晩年の家康から幼い十男の徳川頼宣へ直々に譲られ、頼宣は「江雪左文字」を身に着けて、初陣となる大坂の陣に臨んだという。そして、頼宣が長じて紀州に入国し、初代藩主となったため、以後、紀州徳川家の家宝として、およそ300年にわたり大切に保管されることとなった。こうした意味において「江雪左文字」は、和歌山にゆかりの深い作品ともいえるのである。

展覧会では、歴代の所有者のもとにあった数々の刀剣などとともに「江雪左文字」を展示した。あわせて、「江雪左文字」に関するエピソードの数々も紹介したが、とりわけ注目を集めたのが、和歌山大学紀州経済史文化史研究所が所蔵する「紀州藩家老三浦家文書」のうち、「江戸出府日記」寛文3年（1663）10月3日の記事である。曰く、このたび「江雪左文字」を本阿弥伊兵衛に研がせるにあたり、腰物肝煎を拝命した高田喜八郎と伊達角十郎が、交替で見回りをおこなう必要がある。というのも、5年前に研いだばかりの「江雪左文字」を、不注意により早く錆びさせてしまったためで、今後はこうしたことがないよう、藩主の下向の際にも、腰物肝煎や腰物奉行らが特に注意を払わなければならない、とする。すなわち、研ぎ師のもとに貸し出している間に、盗難やすり替えが起きてはいけないので、昼夜を問わず見張りをつけたということなのであろう。また、当時、頼宣は江戸におり、翌年3月に紀州へ戻るが、この記事の書きぶりからは、「江雪左文字」が藩主とともに江戸と国元を行き来していたとも推測される。かつて、和歌山城の天守に飾られ、御神飯と水を毎朝供えられていた、という逸話も残る「江雪左文字」だが、神君家康から藩祖頼宣が賜った家宝であるばかりでなく、いわば藩主その人のように丁重に扱われた刀でもあったからこそ、藩邸外に持ち出すにあたり家臣2人をつけた処遇は当然といえよう。こうした記述は、紀州徳川家内での「江雪左文字」の扱いを具体的に伝えるとともに、早々に錆びてしまったことへの関係者の動揺や焦りをも想像させ、きわめて興味深い。

一方、同文書のうち、「御用番留帳」寛文11年（1671）1月10日条では、頼宣の死去に際して、幼い孫の長福（ながとみ）（のちの3代藩主綱教）へ「江雪左文字」が譲られた旨を記す。さらに、「江雪左文字」以外の刀剣に関しても、折々の行事での贈答記録のほか、ときには試し切りをおこなった記述などをみることもできる。刀剣という観点から「紀州藩家老三浦家文書」を精査すれば、大名家における刀剣受容のあり方を示す好例となるだろう。

江雪斎、家康、頼宣という名だたる人物の手をわたった「江雪左文字」。その陰には、所有者同士を取り次ぎ、この太刀を守り伝えてきた名もなき人々の存在がある。彼らの働きをつぶさに記した「紀州藩家老三浦家文書」のような資料を丹念に読み解くことこそが、物言わぬ作品に秘められた物語を味わうための第一歩となるのである。

展覧会の開催ならびに「紀州藩家老三浦家文書」の調査にあたりましては、吉村旭輝氏（和歌山大学紀州経済史文化史研究所）、前田正明氏（和歌山県立博物館）に多大なるご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

（月村紀乃／ふくやま美術館学芸員）

和歌山県指定文化財「紀州藩家老三浦家文書のうち　江戸出府日記」
寛文3年（1663）10月3日条
和歌山大学紀州経済史文化史研究所蔵

国宝「太刀　銘筑州住左（号江雪左文字）」南北朝時代（14世紀）　ふくやま美術館蔵（小松安弘コレクション）

紀伊半島のロギオスたち— λόγιος —
紀州研に所属する研究者（ロギオス λόγιος ）たちの研究を紹介します

私の専門は交通政策・交通計画です。この分野は実践的な性格を強く有しており、現地を知り、現地に学ぶことがとても重要です。そのためもあって、これまでに和歌山県、和歌山市、田辺市、新宮市、橋本市、みなべ町、伊賀市、大台町、貝塚市、岬町などで、地域公共交通活性化再生法に基づく法定協議会や、道路運送法に基づく地域公共交通会議の委員を引き受けてきました。また、国土交通省移動等円滑化評価会議近畿分科会などで交通バリアフリーの推進に関わったり、紀伊半島外国人観光客受入推進協議会で観光交通の改善に関わったりもしています。

こういった経験を活かし、令和5年3月に『SDGs時代の地方都市圏の交通まちづくり』（学芸出版社）を上梓しました。これは私にとって3作目の単著書で、現地で撮りためた写真を中心に246の図表を盛り込むなど、読みやすさに配慮した内容となっています。

能「二人静」に「西河（にじこう）の滝」として登場する蜻蛉の滝（奈良県吉野郡川上村西河（にしがわ））

私は週に1度、観世流シテ方小林慶三師の稽古場に通っています。本稿執筆時点では、仕舞「藤戸」や「遊行柳」、謡曲「久世戸」や「鸚鵡小町」の稽古を続けているところです。この趣味を活かすべく、能に登場する文化財のアクセシビリティを評価する研究にも取り組んでいます。200余曲に及ぶ能の台本を全て読み、登場する文化財を抽出し、その場所を特定し、行きやすさ等を評価し、という根気のいる作業ですが、まったく苦にはなりません。

（辻本勝久／交通政策・交通計画）

私は近代の宮中歌壇を担った御歌所を研究対象としています。御歌所は明治初期から昭和21年まで、天皇の御製・皇后の御歌の拝見、歌会始や月次歌会に関する事項等を専門的に掌った宮内省の一部局です。御歌所には諸流派の歌人らが集まり、その一大勢力を総称して「御歌所派」と呼びますが、主流をなしていたのは桂園派でした。

明治期の歌集

特に明治期の歌壇や近代の和歌史を考えるとき、御歌所派が勢力を誇っていた事実は看過できません。当時発行されていた短歌雑誌等からも、御歌所派尊重の意識をうかがうことができます。

しかし、御歌所の存在はほとんど知られておらず、明治期の歌人と言えば、与謝野鉄幹・晶子や正岡子規らを思い浮かべる人が多いのではないでしょうか。実は、伝統的な古典和歌を重視する御歌所派は「旧派」と称され、和歌の革新を求めた鉄幹や子規らによって痛烈に批判されています。いわゆる和歌革新運動です。鉄幹や子規らは「新派」と称され、「近代=新派」の先駆的存在になっていきます。そのため、国語の教科書や便覧等では新派は取り上げられますが、旧派は全く扱われません。ここで問題なのは、当時の歌壇状況を顧慮することなく、新派によって固定化された低い評価が今なお通説として踏襲されているということです。

そこで、私は和歌史上における「旧派=御歌所派」の意義を問い直すべく、これまで十分な調査研究がなされないまま蔑ろにされてきた空白を埋める作業に取り組んでいます。そして、この作業を通して、近代における「歌を詠む」という文化的営みの実態を明らかにしたいと考えています。

（長福香菜／日本文学・和歌）

Exhibition report

学術シンポジウム

紀氏の刀剣―新発見!!紀伊の銀象嵌大刀―

2023年3月11日(土)に、学術シンポジウム「紀氏の刀剣―新発見!! 紀伊の銀象嵌大刀―」を開催しました。刀剣は古墳時代を象徴する器物のひとつです。なかでも金や銀の象嵌が施されたものは珍しく、当時の有力者のみが所有できる貴重なものであったと考えられています。和歌山県内では、これまでに、象嵌が施された資料が2例確認されていましたが、近年の調査・研究により和歌山大学当研究所所蔵資料のなかから、新たな象嵌大刀が発見されました。

今回のシンポジウムでは、近年発見された和歌山大学紀州経済史文化史研究所が所蔵する銀象嵌大刀を中心に、日本列島における象嵌をもつ資料の位置づけや紀伊と中央豪族の関係などについて、有意義な討論が行なわれました。 (吉村旭輝)

講演のようす

討論のようす

[シンポジウムの内容]

▶開会のごあいさつ‥長廣利崇(和歌山大学紀州経済史文化史研究所・所長)
▶趣旨説明・報告‥‥吉村旭輝(和歌山大学紀州経済史文化史研究所・准教授) 「和歌山県師範学校収蔵資料の概要」
▶講　演……豊島直博氏(奈良大学文学部・教授) 「日本列島の刀剣と象嵌」
▶報　告……石丸彩氏(和歌山県教育庁・技師) 「和歌山県内の刀剣と象嵌大刀」
瀬谷今日子氏(和歌山県教育庁・主任) 「新発見の伝岩橋千塚古墳群出土の象嵌大刀」
冨永里菜氏(和歌山市文化振興課・主査) 「伝岩橋千塚古墳群土手形塚出土副葬品」
▶討　論……コーディネーター:仲原知之氏(公益財団法人和歌山県文化財センター・主任)
パネリスト:豊島直博氏・石丸彩氏・瀬谷今日子氏・冨永里菜氏

紀伊半島価値共創基幹プロジェクト報告

オーラルヒストリー・アーカイブズの構築

和歌山県からフランスに移民した女性へのインタビュー調査

紀州経済史文化史研究所では、文字で書かれた資料だけではなく、言葉で語られた歴史を保存する試みを行っています。具体的には、和歌山にゆかりのある方にインタビューを行い、それを録音して、口述の資料として保存・公開するアーカイブを構築する事業を進めています。

2023年1月には、和歌山県出身でフランス在住の画家の女性にインタビューを行いました。これは、和歌山県出身の女性のオーラルヒストリーと、和歌山県から海外に移民した方のオーラルヒストリーとを収集してアーカイブに残すという、二つのプロジェクトの双方に関係する調査です。和歌山での戦争体験、戦後の東京での学生時代、フランス人の夫との出会い、結婚に伴ってフランスに移住して以来の生活・家族・仕事などに関して、一人の女性が生きた90年のライフヒストリーを聞き取り、録音しました。一般的な「移民」のイメージとはまた異なった形で一人外国へと渡り、現地のコミュニティーで生活した女性の体験と、日仏の文化・学術の交流の一端とが語られたこのインタビューは、順次データ化して、本研究所のホームページ内のオーラルヒストリー・アーカイブズにて公開する予定です。

(小関彩子)

フランク・淳子氏(フランク氏宅、2023年1月撮影)

企画展

和歌祭の現在と未来

オープニングイベント
動画はこちら

2023年（令和5）4月11日（火）から6月2日（金）まで、企画展「和歌祭の現在と未来」を開催いたしました。

2022年は、和歌祭四百年式年大祭が盛大に開催され、2021年に復興した渡物である棒振り・獅子・童子、そして2017年（平成29）に復興し、毎年装束を追加している練物・唐人の装束を中心に紹介した特別展を開催しました。

2023年は、次なる四百五十年式年大祭への第一歩となるため、これまでの復興芸能を含む装束類や史料をとおして、過去、現在、未来の和歌祭を考えるきっかけとなる展覧会となりました。

また、オープニングイベントとして4月12日（水）の12時30分から13時まで、和歌祭で唐船・御船歌（2010年に当研究所も参画して復興）を担当している唐船御船歌連中と本学留学生による和歌祭御船歌・唐人披露を実施しました。このイベントでは2023年度に新調された唐人装束2着もお披露目されました。このイベントはYouTubeで公開しております。（和歌山大学公式YouTubeチャンネル）

（吉村旭輝）

【左】企画展のようす、【右】オープニングイベント和歌祭御船歌・唐人披露（2023年4月12日）

紀州経済史文化史研究所担当科目報告

教養科目「わかやまを学ぶ」

2023年度前期教養科目として紀州経済史文化史研究所（以下、紀州研）では、「わかやまを学ぶ」を開講しました。「わかやまを学ぶ」は「わかやま」が持っている固有の特色について歴史的・文化的・社会的視座で捉えながら、専門家の目を通して学ぶ講義です。紀州研の運営委員・所員で構成された文理を問わない13名の教員それぞれが出会い、興味をひかれ、真剣に探究してきた「わかやま」についての講義を各回で行ないました。今年度は236名の学生が履修し、受講生自らの心が動かされるようなテーマやものの考え方を15回とおして学習しました。

第 1 回（4/14）	ガイダンス（吉村旭輝）
第 2 回（4/21）	和歌祭とわかやまの祭礼の特色（吉村旭輝）
第 3 回（4/28）	和歌山の干潟の生き物と生態系サービス（古賀庸憲）
第 4 回（5/12）	和歌山の地形・地質と文化との関係（此松昌彦）
第 5 回（5/19）	反逆者の国・わかやま（海津一朗）
第 6 回（5/26）	移民母県わかやま―グローバルに移動した人々（東悦子）
第 7 回（6/2）	和歌山の鯨と観光（吉田道代）…気象警報発令によりオンデマンド型式
第 8 回（6/9）	わかやまの風土産業（藤田和史）
第 9 回（6/16）	和歌山県の農業・農村（阪井加寿子）
第10回（6/23）	わかやまの農業の楽しみかた（荒木良一）
第11回（6/30）	地形図でみる城下町・和歌山（山神達也）
第12回（7/7）	和歌山の鉱山の歴史（長廣利崇）
第13回（7/14）	紀伊半島の民家と石垣の地域性（平田隆行）
第14回（7/21）	和歌山に歌い継がれた音楽（遠藤史）
第15回（7/28）	全体の総括（吉村旭輝）

令和4年度活動報告

4月11日(月)	本研究所員、論文作成の資料として調査研究するため「高野山絵図」、「熊野名所遊覧案内」の資料撮影
4月12日(火) ～6月3日(金)	特別展「和歌祭四百年式年大祭―御神忌と大祭―」
4月13日(水)	特別展関連イベント　和歌祭御船歌・唐人披露
4月14日(木)	本学教員より、高野山を紹介するホームページおよびアプリに掲載するため、「戦前絵はがき」No.4(高野山)壮厳善美を盡す金堂全景、No.566(高野山)奥之院御廟の掲載申請
4月26日(火)	ふくやま美術館学芸員、特別展で出陳する所蔵の太刀の伝来調査のため、紀州藩家老三浦家文書『江戸出府日記』(寛文3年9月朔日～10月14 日)ほか3点の閲覧および撮影
4月26日(火)	和歌山県立博物館学芸員、秋に開催予定の特別展に関わる資料調査のため、紀州藩家老三浦家文書『御用番留帳』(寛文4年5月)ほか4点の撮影
5月11日(水)	第1回運営委員会開催
5月15日(日)	和歌祭見学会　和歌山城周辺紀州研ブース(図録の頒布)
6月2日(木)	本学名誉教授、明治前期紀の川河口地域の歴史地理研究のため『宮前村郷土誌』の閲覧および撮影
6月13日(月)	和歌山県紀伊風土記の丘学芸員、岩橋千塚古墳群出土品の研究のため、伝岩橋千塚古墳群出土品の閲覧および撮影
6月14日(火)	特別展「和歌祭四百年式年大祭―御神忌と大祭―」、特別展関連イベント　和歌祭御船歌・唐人披露の動画公開
6月16日(木)	第2回運営委員会開催
6月17日(金)	和歌山市立博物館学芸員、秋に開催予定の特別展に関する資料調査のため、紀州藩家老三浦家文書『江戸出府日記』(寛文3年卯ノ4月19日5月中)ほか13点の閲覧および撮影
6月23日(木)	一般の方、大阪毎日新聞和歌山版昭和16年6月他3点閲覧
6月28日(火)	紀要第43号の投稿原稿募集
6月29日(水)	和歌山市和歌山城整備企画課学芸員、夏の企画展に向けた資料調査のため、紀州藩家老三浦家文書『御文之ひかへ』45点の閲覧および撮影
7月6日(水) ～9月16日(金)	常設展「紀伊半島の文化遺産」
7月6日(水)	和歌山県立文書館嘱託研究員、『和歌山県立文書館だより』の執筆および同館開催の歴史講座での報告のため、小滝徳五郎家資料9点閲覧および撮影
7月6日(水)	和歌山市より、わかやま歴史館2階歴史展示室夏の企画展示のため、紀州藩家老三浦家文書『覚書』(安永3年正月～同4年正月)の借用依頼
7月19日(火)	一般の方、郷土史研究のため日高郡天田村中村家旧蔵文書ほか3点の閲覧および撮影
7月21日(木)	朝日新聞和歌山総局記者より、展示告知記事のため「戦前絵はがき」No.4(高野山)壮厳善美を盡す金堂全景、No.90(紀州名勝)長堤に白波寄する片男波の掲載申請
7月31日(日)	2022年度特別展関連イベント 和歌祭四百年式年大祭記念学術シンポジウム「東照宮祭礼と和歌山」開催
8月5日(金)	紀要第42号の投稿原稿応募締切
8月5日(金)	和歌山県立博物館より、特別展のため紀州藩家老三浦家文書『御用番留帳』(寛文4年5月朔日ゟ29日)ほか2冊、『年中日記』(正徳5年正月～6月)の借用および写真掲載申請
8月23日(火)	本学名誉教授、近世木ノ本村の土地構造の研究のため、高橋家資料A-313 第二大区三小区木ノ本村榎原村小屋村三ヶ村全耕地図面(青焼複製)ほか1点の閲覧および撮影
8月27日(土)	和歌山市立博物館学芸員より、特別展「表千家とわかやま―紀州藩における交流―」図録への、紀州藩家老三浦家文書『江戸出府日記』(寛文3年)ほか24点の一部翻刻掲載依頼。24点のうち13点の出陳および図録写真掲載依頼
9月1日(木)	和歌祭四百年式年大祭記念学術シンポジウム「東照宮祭礼と和歌山」の動画公開
9月2日(金)	株式会社ブリッジより、関西テレビの番組内で使用するため、「戦前絵はがき」No.270(湯崎温泉名勝) 臨海温泉場湯崎の全景Aほか3点の使用許可申請
9月16日(金)	和歌山県紀伊風土記の丘学芸員、岩橋千塚古墳群出土品の研究のため、伝岩橋千塚古墳群出土品の閲覧および撮影
9月20日(火)	紀要第42号の原稿締切
9月28日(水)	第3回運営委員会
10月17日(月)	本研究所の所蔵資料「伝岩橋千塚古墳群」出土鉄製品における銀象嵌文様の発見の記者会見
10月17日(月)	和歌山市職員、県内の古墳時代の耳環の集成のため「寺山1号墳」耳環ほか3点を閲覧および撮影
10月18日(火)	ふくやま美術館より、展覧会「名刀 江雪左文字―江雪斎、家康、頼宣が愛した刀の物語―」へ出陳のため、紀州藩家老三浦家文書『江戸出府日記』(寛文3年9月朔日～10月14日)ほか3点の借用依頼
11月1日(火)	明石工業高等専門学校教員、研究のため『教授細目』(数学科)明治38年ほか2点の閲覧および撮影
11月8日(火)	本研究所員、国際観光学研究センターのホームページに公開する報告書作成のため『和歌浦名所』(1925 初三郎鳥瞰図)1点の掲載申請
11月8日(火) ～ 12月23日(金)	2022年度企画展 ブラジル移住者の父 松原安太郎生誕130周年記念企画展「移民と和歌山2022:ブラジル移住者の軌跡をたどって」
11月30日(水)	第4回運営委員会
12月	紀州経済史文化史研究所紀要第43号発行
12月13日(火)	神戸大学名誉教授、紀伊湯浅醤油醸造業史の研究のため『紀伊由良造酒醤油関係文書』ほか4点の閲覧および撮影
12月22日(木)	御坊市教育委員会より、御坊祭総合調査報告書に掲載のため「戦前絵はがき」No.221御坊小竹八幡宮放生会(其七)ほか2点の掲載申請
1月11日(水)	和歌山県立紀伊風土記の丘より、冬季企画展のため伝岩橋千塚古墳群須恵器 ハソウほか12点の借用依頼
1月13日(金)	第5回運営委員会
1月26日(木) ～3月10日(金)	常設展「紀伊半島の文化遺産」
1月31日(火)	明石工業高等専門学校教員、研究のため『算術科ニオケル応用問題の研究』ほか1点の閲覧および撮影
2月15日(水)	第6回運営委員会
2月21日(火)	2022年度 ブラジル移住者の父 松原安太郎生誕130周年記念企画展　「移民と和歌山2022:ブラジル移住者の軌跡をたどって」の動画公開
2月21日(火)	株式会社河原書店より、月刊誌『茶道雑誌』で和歌山市立博物館学芸員が執筆する企画記事の参考挿図として、紀州藩家老三浦家文書『江戸出府日記』(寛文4年2月3日の項)の掲載申請
3月2日(木) ～3月6日(月)	第7回運営委員会(メール審議)
3月3日(金)	和歌山県立紀伊風土記の丘より、春季企画展のため「伝岩橋千塚 円筒埴輪2点の借用依頼
3月11日(土)	学術シンポジウム「紀氏の刀剣ー新発見!!紀伊の銀象嵌大刀ー」
3月13日(月)	同志社大学教授より、出版著書に掲載のため紀州藩家老三浦家文書『家乗』第2冊、5冊のうち6点の掲載申請
3月16日(木)	和歌山市立博物館学芸員、近世の葛城修験に関する研究のため、向井家文書『本山諸先達葛城城嶺修行現参記 第二』(明和5年)ほか13点の閲覧および撮影

教育研究アドバイザーの活動

上村雅洋名誉教授

1. 活動日
   4月4日、11日、18日、25日
   5月9日、16日、23日、30日
   6月6日、13日、20日、27日
   7月4日、11日、25日
   8月8日、22日、29日
   9月5日、12日
   10月3日、17日、24日、31日
   11月7日、14日、28日
   12月5日、12日、19日
   1月16日、23日、30日
   2月13日、20日、27日
   3月6日、27日
2. 活動日数　38日

藤本清二郎名誉教授

1. 活動日
   4月5日、12日、26日
   5月10日、17日
   7月19日
   8月2日、9日、23日、31日
   9月22日、27日
   10月4日、11日、18日、25日
   11月8日、16日、22日、30日
   12月14日、20日
   1月11日、17日、24日
   2月7日、14日
   3月7日
2. 活動日数　28日

information

特別展 「移民と和歌山2023：記憶と遺物の継承～過去から現在、そして未来へ～」について

日本では、明治期に海外への集団的な移民が始まりました。和歌山県からも3万人以上の県民が労働を主たる目的として北米や中南米をはじめ諸外国へと渡っています。

日本人海外移民については、時代の変遷と共に人々の記憶から遠のき、移民した人々の遺物もまた世代交代とともに消失の危機にあるのが現状となっています。そのような状況下、和歌山県においては移民した先人の遺品が現在まで大切に保管されてきた家庭が少なからずあり、移民あるいは移住の歴史を保存し次世代へ伝えていこうという機運も高まっています。

2009年以来、紀州経済史文化史研究所は移民をテーマとした展示を開催してまいりました。その目的は、同所の研究成果の公開というだけではなく、次世代を担う若者や一般の方々に和歌山県の移民史について伝えていくことでした。このような取り組みにおいて、和歌山県下において、移民母村と呼ばれた自治体や移民・移住に深く関わる機関や団体の皆様の協力を得て、貴重な情報や資料を提供いただいてまいりました。

本展示は、和歌山県における米国移民の先駆けといわれる那賀地方※の米国移民を取り上げ、同地の家庭から寄贈いただいた資料を中心に展示しています。先人が残された遺品を通して米国へ渡った人々の仕事や暮らしぶりがみえてきます。和歌山県移民史を紡いできた一人一人の志や人生にも思いを馳せていただければと願っています。　（東悦子）

※ここでの那賀地方は、旧・那賀郡（現・岩出市、現・紀の川市）、および和歌山市と紀美野町の一部のこと。

日　　程／2023年10月3日［火］～12月22日［金］　土日祝日および図書館休館日は閉室
会　　場／和歌山大学紀州経済史文化史研究所展示室
内　　容／現・紀の川市の家庭から寄贈された渡米した祖先のさまざまな資料の展示

展示の主な構成

1. 那賀地方のアメリカ移民について
2. 西家資料について
3. 梅田家資料について
4. 並松家資料について
5. 清水家資料について
6. 阪上家資料について
7. 児玉家資料について

「那賀地方のアメリカ移民について」（一部抜粋）

紀ノ川の中流に位置する旧那賀郡（現在の紀の川市、岩出市など）は、和歌山県下におけるアメリカ移民の発祥の地であろうとされている。池田村やその周辺地域から渡米者を輩出した要因に、伊達多仲（だてたちゅう）、本多和一郎（ほんだわいちろう）、J.B.ヘール牧師らの影響があげられる。

本多和一郎（1852–1895）は、福沢諭吉の私塾慶応義塾に学び、1880年（明治13）、郷里に私塾共修学舎（きょうしゅうがくしゃ）を開き、洋学、漢学、歴史などを教え、舎内には「渡米相談所（米国遊学事務所）」を設けた。

このような私塾によって学問を学び海外へも目を向ける土壌があったと考えられる。

令和4年度展示観覧者数

会　期	展示名	観覧者数	和歌山大学公式YouTube閲覧回数（2023年9月15日時点）
4/12～6/3	特別展「和歌祭四百年式年大祭―御神忌と大祭―」	153	167
	同　オープニングイベント		782
7/6～9/16	常設展「紀伊半島の文化遺産」	57	101
11/8～12/23	ブラジル移住者の父 松原安太郎生誕130周年記念企画展「移民と和歌山2022：ブラジル移住者の軌跡をたどって」	115	100
1/26～3/10	常設展「紀伊半島の文化遺産」	6	
	合　計	331	1150

資料紹介　『紀州藩家老三浦為時御用日記』下巻の刊行

本研究所では、2022年度に『紀州藩家老三浦為時御用日記』上巻を刊行したが、2023年度にこの下巻を公刊する。三浦為時の日記は、下記の翻刻者上村氏の解説にあるように、上級武士の日常生活が分かる史料である。この資料集は、有償販売（価格未定）となるが、多くの人々に読んでもらいたい。なお、販売は、2024年4月を予定している。本研究所のホームページから購入できる（QRコードにリンク）。上巻とあわせて利用して欲しい。（長廣利崇／本研究所所長／近現代日本経済史・経営史）

【解　説】　下巻は、上巻に引き続き、紀州藩家老三浦為時の寛文9年（1669）4月16日から彼が亡くなる直前の延宝4年（1676）11月8日までの「御用番留帳」「江戸出府日記」を翻刻する。また、補遺として寛文2年の「江戸出府日記」も収める。内容としては、晩年にいたる為時の日常生活がうかがえる。そこには、初代藩主頼宣が寛文10年11月中頃から体調を崩し、翌年正月10日に衰弱して亡くなっていく状況を、為時が一日に何度も訪れ毎日の食事の量や脈の具合など細かく尋ね、その結果に一喜一憂しながら見守っている姿がある。さらに、その後の葬儀・法事に関する状況も記録される。藩主から重鎮として頼りにされる一方、足が不自由になり奉公もままならず、隠居を願い悶々として過ごす老齢の様子もわかる。私的な側面では、三男の弥之助が中川七左衛門家へ、末子の友之助が垣屋十郎兵衛家へ養子に行き、長男の玄蕃（三代の為隆）も江戸出府前に3000石を拝領し、嫁をもらい孫娘が誕生するという、為時にとっては幸せな晩年が描かれる。

（上村雅洋／本学名誉教授／日本経済史・経営史）

編集後記

『きのみなと』2023年秋号をお読みいただき、ありがとうございます。コロナ禍から通常の社会生活を取り戻しつつある2022年度は、新しい所員もお迎えし、当研究所を舞台に様々な展覧会やシンポジウム、調査・研究などが活発に行われました。従来より継続的に取り組んでいる、和歌山から海外へと移民した方々の歴史に関する研究は、展覧会やシンポジウム、オーラルヒストリー収集などの形で成果となっています。また、当研究所の重要な機能である、資料の収集と保全、公開については、2～3月にふくやま美術館において紀州徳川家の開祖頼宣の愛刀「江雪左文字」の展覧会が開催された際、紀州研が所蔵する「紀州藩家老三浦家文書」が展示されるなど、資料を介して各地と交流ができたこともありがたいことでした。3月に刊行・発売された『紀州藩家老三浦為時御用日記（上巻）』は、幸いにも多くのお問い合わせ・お買い求めをいただいております。当研究所が和歌山と多くの皆様方と繋ぐ役割を果たすことができますよう、今後とも皆様のご支援をよろしくお願いいたします。　小関彩子

紀州研
ホームページ

紀州研
WAKAYAMA UNIVERSITY

編集／発行　和歌山大学 紀伊半島価値共創基幹 紀州経済史文化史研究所
〒640-8510 和歌山市栄谷930 [e-mail] kisyuken@ml.wakayama-u.ac.jp